「人の子が現れる日―その時を見据えて生きる―」

ルカ 17:22-37

2020.5.10 南与力町教会朝拝

序：文脈―神の国の現在と未来

今日の箇所のすぐ前のところでファリサイ派の人々がイエス様に質問をしていました。
「神の国はいつ来るのか」と。
それに対してイエス様は答えられました。
「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

神の国はイエス・キリストというお方において既に到来しました。現在すでに私たちの間に、私たちの只中にあるのです。しかしファリサイ派の人々はそのことに気づいておらず、信じていませんでした。だからこそイエス様はそのことを彼らに語られたのです。

それに続く今日の箇所ではイエス様は弟子たちに対し「人の子が現れる日」について教えておられます。神の国はイエス・キリストがすでに来られたことによって現在ここにあると同時に、イエス・キリストが再び来られる日に完成する未来のものでもあります。

１．人の子の現れ方（22-25）

イエス様はまず弟子たちに次のように語られました。
「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。」

この時弟子たちはイエス様をその目で見ることができていました。しかしやがてイエス様が弟子たちの目の前からいなくなる時が来るのです。その時、弟子たちは「人の子の日を一日だけでも見たいと望む」ようになります。「人の子」であるイエス様が現れ、全世界を治めるようになる、そういう日々の一日だけでもいいから見たいと切望するようになるのです。「しかし、見ることはできないだろう」とイエス様は言われます。

私たちも今イエス様を見たくても見ることができない日々、そういう時代を生きています。そして私たちも、イエス様が早く来て、神の国を完成させてくださればよいのにと願うのではないでしょうか。しかしまだ見ることはできない。今はそのような時代です。

そしてそういう時だからこそ、私たちには誘惑や惑わしがあります。23 節にはこうあります。
「『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。」

これは偽メシアに騙されるな、という警告です。イエス様を見たいと望んでいる私たちに対し人々は「見よ、あそこにメシアがいる」、「見よ、ここにキリストがいる」と言ってくるのです。実際、新興宗教などの異端は、その教祖が「再臨のキリスト」だと主張して人々を誘い込もうとします。しかし、イエス様はそういう人々の言葉を聞いても、出て行ってはならない、ついて行ってはならない、と警告しておら

れるのです。なぜなら、24 節。
「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。」
　人の子が現れるのは、稲妻がピカッと光って、大空の端から端へと輝くのと同じような仕方なのです。稲妻が光ったことは、一瞬のうちに空の下にいるすべての人々に知られます。再臨のキリストもそのように輝かしい姿で現れ、そしてすべての人が一瞬のうちにそれだとはっきりわかるということです。ですから、人から「見よ、あそこにいる、ここにいる」と教えてもらってはじめて知るようなメシアは皆、偽メシア・偽キリストなのです。本物のキリストは誰にも疑いようのない仕方で、稲妻の輝きのように現れます。

　しかしキリストはその前に多くの苦しみを受けなければなりませんでした。25 節
「しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。」
　イエス様は栄光に輝いて現れる前に、まず多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥される、捨て去られることになっていたのです。

２．人の子が現れる日に起こること――ノアやロトの時代のように（26-30）
　ではそんな世界にイエス様が来られると、どういうことが起こるのでしょうか。26 節 27 節にはこうあります。
「ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。」
　さらに 28 節から 30 節ではこうも言われています。
「ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。人の子が現れる日にも、同じことが起こる。」

　ノアの時代、洪水によって地上のすべての者が滅ぼされてしまいました（創世記 6-7 章）。しかし人々は「ノアが箱舟に入る」まさにその日まで、「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり」して、普通の生活を送っていたのです。まさか大洪水が襲ってくるなどとは思っていませんでした。しかしそこに突然大洪水が襲い、皆滅んでしまいました。
　ロトの時代、ソドムの町にも同じようなことが起こりました。ソドムには天から火と硫黄が降ってきて、やはり一人残らず滅ぼされてしまったのです（創世記 19 章）。そして「ロトがソドムから出て行ったその日」まで、人々はそんなことになるとは思いもせず、「食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりして」日常生活を送っていたのです。しかしそこに突然、火と硫黄が降り注ぎ、破滅が襲いました。それと同じようなことが、人の子が現れる日にも起こる、とイエス様は言われるのです。
　それは恐ろしいことです。しかしなぜそんなことが起こるのでしょうか。なぜあの時のような破滅が再び襲ってくるイエス様は言われるのでしょうか。創世記を読みますと、ノアの洪水が起こった時、「この地は神の前に堕落し、不法に満ちていた。…見よ、それは堕落し、すべて肉なる者はこの地で堕落の道

を歩んでいた。」（創世記 6:11-12）とあります。またソドムについても「ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた」（創世記 13:13）とあります。ノアの洪水にしても、ソドムの滅びにしても、そこに住む人々が邪悪で罪深かったために、神の裁きを受け、滅ぼされてしまったのです。しかしイエス様はその人々の邪悪さを今日の所では直接語っておられません。ただ彼らが「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた」、ソドムの人々も「食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていた」と言われているだけです。それ自体は悪いことではありません。しかし、彼らは神を無視して、ただ自分たちのために安穏と生活していたのです。まさか神の裁きが下るなど思ってもいなかったでしょう。では人の子が現れる時、なぜ同じように人々が滅ぼされなければならないのでしょうか。それは当然罪の故ですが、具体的には 25 節に語られていたことと関係していると思います。つまり「人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている」ということです。ここで「排斥される」と訳されている言葉には「テストの結果不合格とみなして捨てる、吟味した上で不適と判定する」という意味があります。この時代の人々は神から遣わされた救い主を吟味した上で、こんなものはいらないと捨て去ってしまったのです。それゆえ十字架につけて殺したのです。そしてそれこそが神に対する決定的な罪でした。しかしそんなことは考えもせず人々は何事もなかったかのように「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり」して平然と生きていきます。しかしそれはイエス様の時代だけでなく、私たちが生きている今の時代においても確かに起こっていることではないでしょうか。イエス・キリストのことを知りながら、福音を聞きながら、受け入れようとしない、信じようとしない。そんなものは必要ないと捨て去ってしまう。ただ「食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたり」して自分たちの必要を満たしながら生きています。自分たちに神の裁きが下ることなど考えもしません。しかし「人の子」であるイエス様が現れる時には、自らの罪故に裁きを受けなければならず、滅ぼされてしまうのです（ルカ 10:10-16 参照）。

③滅びから免れ、命を保つために（31-33）

　では滅びから免れるためにはどうするべきでしょうか。第一に、悔い改め、主イエスを信じること、救い主と受け入れることです。そしてイエス様は弟子たちに次のような警告もなさっています。31 節
「その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。」

　イエス様が現れる日に、屋上にいる者は、家の中に家財、大切な財産、所持品があるからといって、それを取りに行ってはならない、と戒められています。そして「同じように、畑にいる者も帰ってはならない」と言われています。この「帰ってはならない」とは「後ろに戻ってはならない、後ろを振り返ってはならない」と訳すこともできます。そして 32 節の言葉が続きます。
「ロトの妻のことを思い出しなさい」。

　ロトの妻もロトと共にソドムから連れ出され、救い出されようとしていました。そして主はロトたちに語っておられました。創世記 19 章 17 節
「命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。山へ逃げなさい。さもないと、滅びることになる。」

　そのように主から言われていたにも関わらず、ロトの妻は途中で後ろを振り返ってしまいました。そしてその結果「塩の柱」になってしまったのです（創 19:26）。あと一歩で救われるという時に滅びてし

まったのです。イエス様は、そのロトの妻のことを思い起こしなさい、心に留めていなさい、とおっしゃいます。ロトの妻が後ろを振り向いたのは、ソドムでの生活、そこに残してきたものに未練や執着があったからでしょう。しかしイエス様は私たちに、「人の子が現れる日には、ロトの妻のように後ろ髪を引かれるようにして振り返ってはいけない。この世での所有物や生活に執着してはならない」と警告しておられるのです。

そして 33 節
「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。」
これと似たような言葉は福音書の他の箇所にも出てきます（ルカ 9:24 等）。逆説的であり理解するのが難しいかもしれません。人の子が現れる時、自分の命を自分のために保とうとするなら、結果的にそれを滅ぼすことになってしまう。しかし、自分の命を滅ぼす者は、それを生かすことになる、そう言われるのです。しかし考えてみますとノアもロトも自分の命を生かそうと努めたのではないでしょうか。だからこそ、ノアは箱舟を作り、ロトはソドムから必死で逃げたのだと思います。それになのになぜ、イエス様は「自分の命を生かそうと努める者は、それを失う」などと言われたのでしょうか。また逆に「それを失う者は、かえって保つ」とは一体どういうことなのでしょうか。
続く 34 節、35 節に考えるヒントがあるように思います。お読みいたします。
「言っておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」
ここで「連れて行かれ」と訳されている言葉は、「自分の所に受け入れる、迎え入れる」という意味があります。それはすなわちその日に現れる「人の子」イエス・キリストによって受け入れられる、イエス様のもとに迎え入れられる、ということでしょう（ヨハネ 14:3、Ⅰテサ 4:17 参照）。イエス様によって滅びから救われるということです。ですから、私たちは、イエス様が来られるその日、自分で自分の命を生かそうと努める必要はないのです。むしろそのようにする者は、イエス様を信頼していないということであり、結果的に自分の命を失ってしまうことになります。逆に、自分の命を失う者、すなわち自分で自分の命を保とうとせず、命を含めた一切をイエス様に委ねる者は、かえって命を保つことになる、すなわちイエス様のもとで永遠に生きることができるのです。イエス様が言われた「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」という言葉にはそのような意味があります。その日、その時に、自分の命さえもイエス様にお委ねする信仰、イエス様が自分を救ってくださるという信仰があるか否かが問われるのです。

そしてイエス様がおっしゃっているように、二人が同じ寝室に寝ていれば一人はイエス様のもとに迎え入れられ、救われますが、他の一人はそのまま残され、滅びてしまいます。そして同じように、二人の女性が一緒に臼を引く仕事をしていたとしても、一人は連れていかれ、他の一人は残されてしまう。いくら地上で近しい関係にあり、共に同じ生活を送っていたとしても、その日には境界線が引かれ、分離されてしまうのです。イエス様を信じる者はイエス様のもとに迎え入れられ、そうでない人は取り残されてしまいます。イエス様が来られる日、そのような決定的な分離、裁きがなされるのです。

それを聞いた弟子たちがイエス様に尋ねました。
「主よ、それはどこで起こるのですか」
そういう分離や裁きはどこで起こるのですか、ということでしょう。イエス様のこうお答えになりました。
「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」
イエス様はどこどこで起こると特定の場所を指定されませんでした。その代わり、「死体がある所、そこに、はげ鷹も集まるのだ」と諺のような言葉を語られました。ここに出てくる「はげ鷹」は裁きの象徴だと思われます。イエス様が語られた裁きというものは、はげ鷹が死体のある所に集まるように、人がいるところにはどこにでも起こる。そのことをイエス様は伝えようとされたのでしょう。

結論：
私たちは今コロナウイルスによる世界的な非常事態の中にあります。このような大きな災いの時には私たちは世の終わりや神の裁きについて考えやすいかもしれません。しかし、このような大きな災いが起こったからといってすぐに世の終わりが来るわけではありません（ルカ 21:9-10)。おそらくこのウイルスによる非常事態もいずれは落ち着き、日常が戻って来るでしょう。それは喜ばしいことです。しかし、私たちはその日常がそのままずっと続くと考えるわけにはいきません。またウイルスが蔓延するかもしれないということもそうですが、それ以上に、ここでイエス様が語っておられるような「人の子の日」が来ること、その日にはあのノアの時代やロトの時代に起こったようなことが起こることを心に留めておかなければなりません。人々が「食べたり、飲んだり、めとったり、嫁いだり」している、また「買ったり、売ったり、植えたり、建てたり」している、そのような日常の只中に突然「人の子の日」は来る、そして破滅が襲うのです。そのことを忘れてはなりません。そしてその破滅から逃れるために、私たちはこの世の生活に没頭し執着するのではなく、やがて来られるイエス様に信仰の目を向けている必要があります。そのように目を覚ましてイエス様が来られる日を待ち望んでいるのなら、私たちはその日を恐れる必要はありません。その日にはイエス様ご自身が私たちをご自分のもとに迎え入れ、来たるべき裁きと滅びから救い出してくださるからです。そしてこのことを人々に伝える使命が私たちには与えられています。お祈りをいたします。

祈り
主なる神様、あなたは「人の子」であるイエス・キリストにこの世を裁く権能をお授けになりました。イエス様が再び来られる日、全世界に裁きが下されることを私たちは知らされています。それがいつなのか私たちには分かりませんが、いつ来てもいいように、私たちが心の目を覚まし、主を待ち望み、祈りつつ生きていくことができますように。そうしてわたしたちがその日に、滅びることなく、救いにあずかることができますように、守り導いてください。そしてまだイエス様のことを知らず、信じていない周りの方々に、私たちがイエス様のことをお伝えし、滅びではなく、救いの中へとお招きすることができますように。主が聖霊によって私たちを強め、導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。